

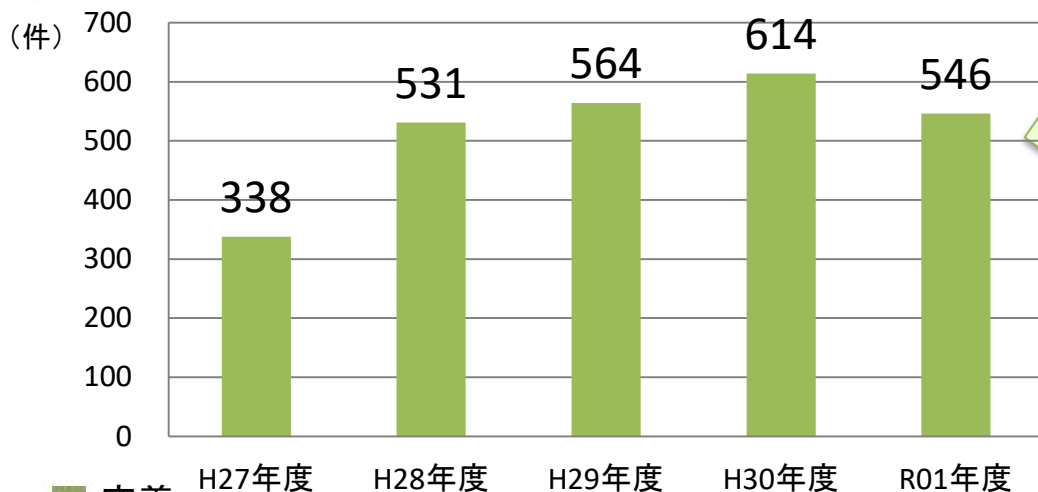
## 薬剤部：遺伝子多型解析検査件数

### ■ 解説: process指標

個別化薬物療法の実現に向けた先進的な取り組みの指標として、「遺伝子多型解析検査件数」を採用しています。個々の患者に合わせた薬剤の選択や投与量の調節を行う上で、遺伝子多型解析が有用であることは、多くの臨床研究から明らかにされています。しかし、臨床現場での応用体制の整備は進んでおらず、本邦において、日常業務の一環として薬物治療関連の遺伝子多型解析を行っている施設はありません。

当院では、平成26年2月から全国で初めて、「遺伝子多型解析オーダリングシステム」の運用を開始し、遺伝子多型解析に基づく個別化薬物療法を推進しています。遺伝子多型に基づいた薬剤選択や投与量調節など、薬学の観点から薬物療法の質の向上に貢献しています。

### ■ 当院の実績



#### 《自己点検評価》

平成28年度以降は、550～600件前後で推移しています。

NUDT15遺伝子多型検査の保険適用に伴い、従来のシステイン(c.415C>T)に加えて、ヒスチジン(c.416G>A)の測定を追加しました。

### ■ 定義

1年間における遺伝子多型測定件数を集計する。

### ■ 算式

遺伝子多型測定件数

### ■ 参照文献・学会ガイドライン等

ファーマコゲノミクス検査の運用指針2012(日本臨床検査医学会、日本人類遺伝学会、日本臨床検査標準協議会)

